

## 第3章 倉谷西中田遺跡の調査

### 第1節 遺跡の立地と層序

#### 1 遺跡の立地と環境(第2・6図、P.L.1)

倉谷西中田遺跡は、大山北麓から日本海に派生する標高49~61mの丘陵上に立地し、中央の小さな谷が丘陵を東西に分けている。当遺跡の西側の丘陵上には小竹上鷹ノ尾遺跡が、東側には後述する倉谷荒田遺跡がある。平成21年度に道路建設予定地内の大部分(1・3・4区)を調査しており、今年度の調査地は、遺跡の中を南北に横切る町道部分(2区)にあたる。今年度調査地(2区)の路面直下は、地山以下まで大きく削平され、また、水道など複数の埋設管によって深く攪乱されており、遺物包含層や遺構は全く遺存していなかった。路面より東側の一部分については町道敷設時の削平が及んでおらず、遺構が遺存していた。

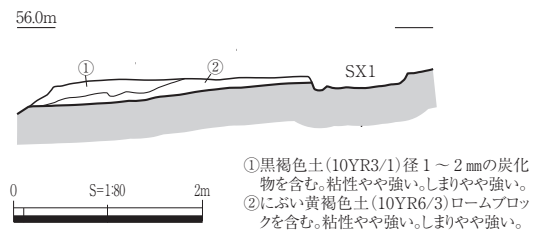
調査前の地目は山林・畑地であり、旧地形は耕作などに伴い改変を受けている。



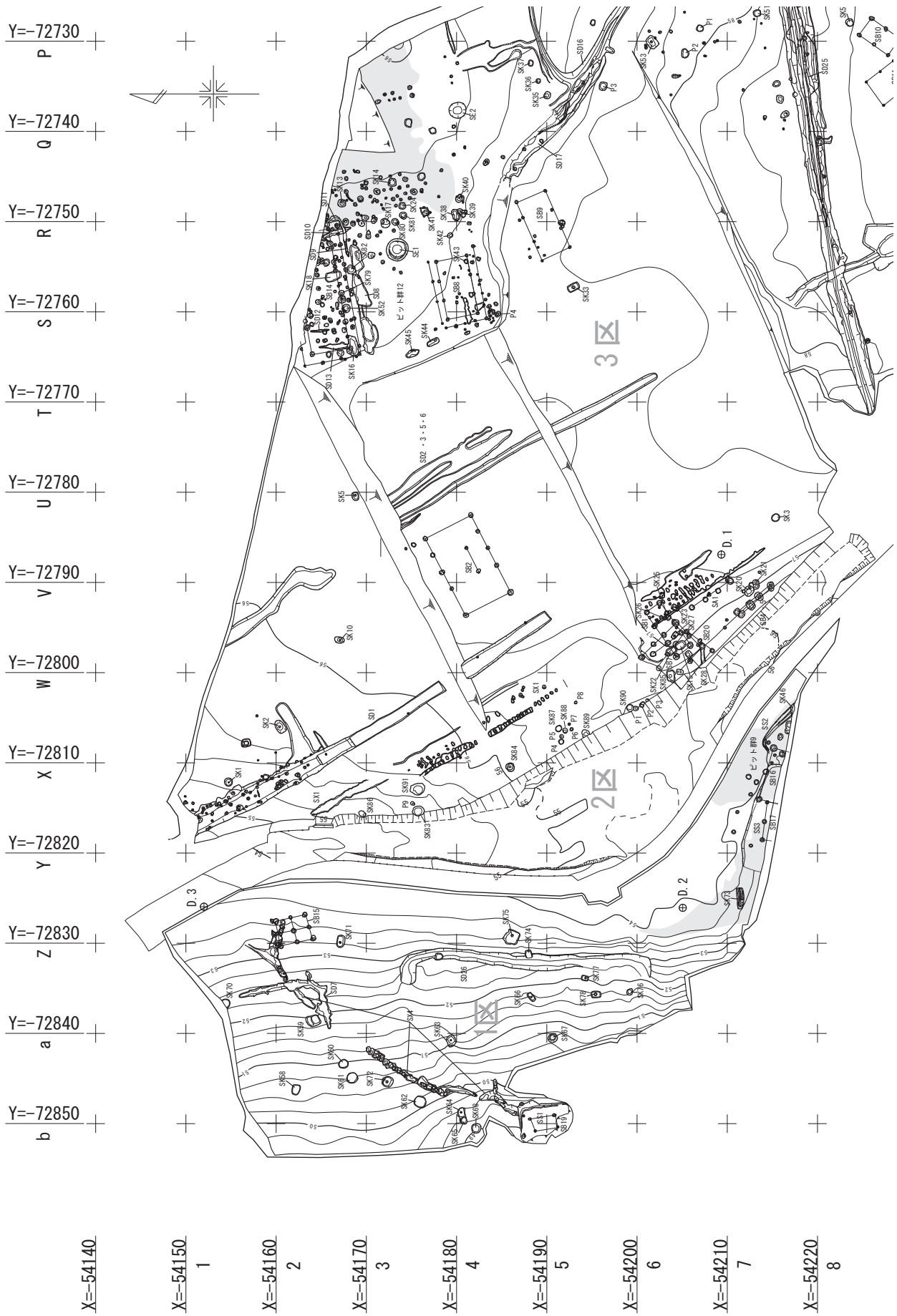
第6図 調査地周辺地形及び調査区位置図

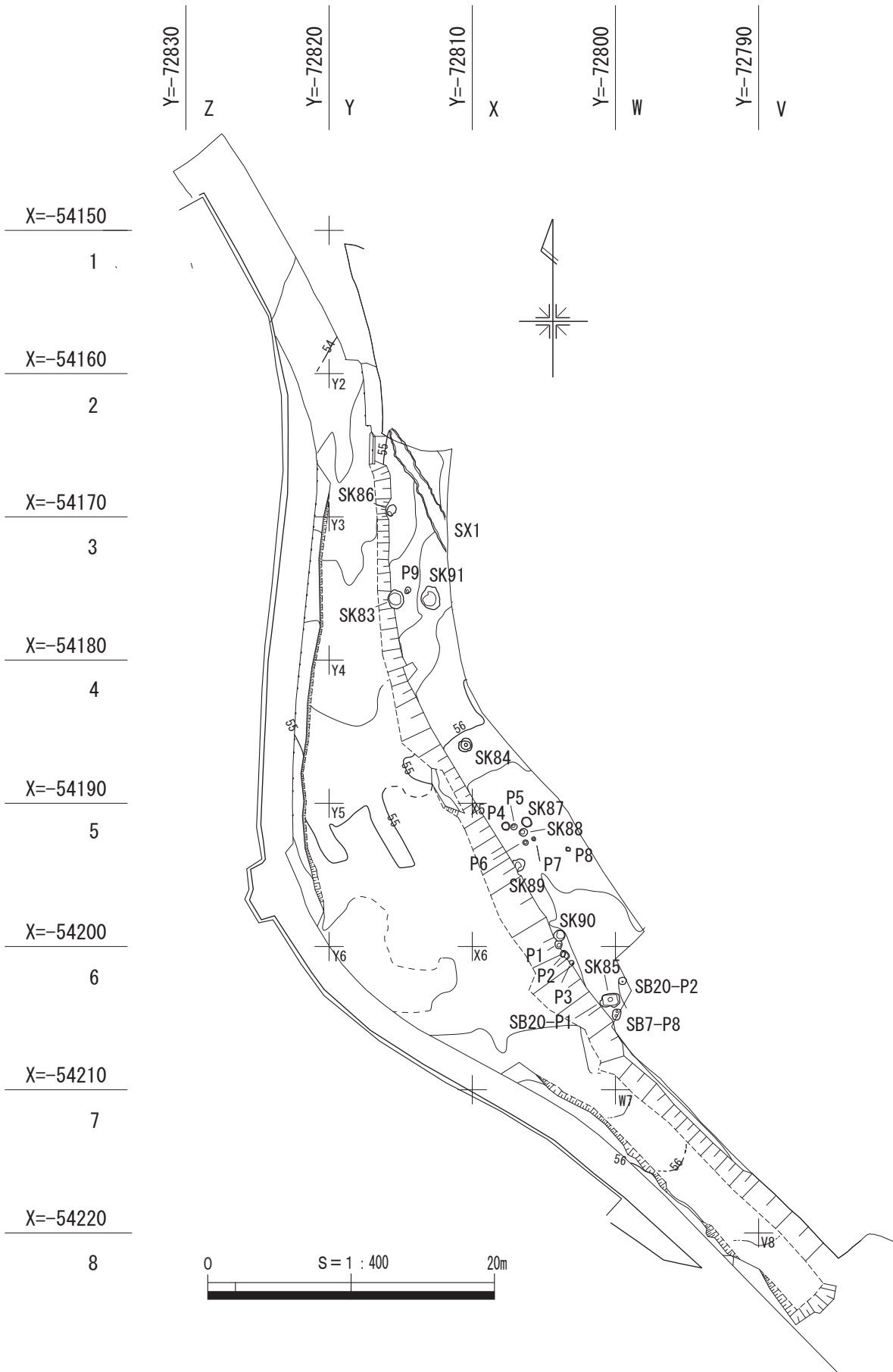
#### 2 調査地内の土層堆積(第7図、P.L.6)

今年度調査地は、道路による破壊を免れた範囲においても地山付近まで削平を受けており、ごく一部で堆積土を確認したに過ぎない。検出した遺構はすべてにぶい黄褐色土及び地山上面で検出した。



第7図 調査地内土層断面





第9図 2区遺構配置図

## 第2節 調査の概要

倉谷西中田遺跡は平成21年度に遺跡の大部分を調査しており、今回は残っていた一部の範囲(2区)が調査対象であった。1区と3区に挟まれた狭い範囲であり、このため、両隣の地区の遺構がどのように展開・収束するかについて明らかにすることが調査の課題であった。2区内の西側は大きく削平され遺構は残存していなかったが、東側で遺構・遺物を確認した。縄文時代の落とし穴、古代の掘立柱建物跡の柱穴、中世の土坑などを検出し、遺構の内外から製塩土器などの遺物が出土している。

## 第3節 縄文時代の調査

### 1 概要

縄文時代の遺構としては、落とし穴3基(SK83~85)、土坑1基(SK86)を確認した。周辺は平成21年度の調査で南北方向に配列する落とし穴の一群が想定されている箇所である。

これらの遺構は、にぶい黄褐色土上面あるいは地山上面で、黒色から黒褐色土の広がりとして検出した。埋土としては黒褐色系及び灰褐色系の土が堆積しており、本来は遺構を検出したにぶい黄褐色土の上層にこれらの層が堆積しており、その層中から掘り込まれた遺構と推定する。縄文時代に該当する遺物は調査地内から出土していないため、放射性炭素年代測定結果(第7節)や埋土の特徴をもって縄文時代の遺構と判断した。

### SK83(第10図、P L . 2)

X3グリッドのほぼ中央、標高55.6mの平坦地に位置する。西側3分の1程度を町道敷設時の掘削で破壊されていた。にぶい黄褐色土上面で、黒色土の広がりを検出した。

平面形は円形で、径1.08~1.35m、検出面からの深さは最大1.83mを測る。埋土は3層に分けられ、中~上位は黒色土を主体とするが、底付近は粘性・しまりの強い褐灰色土が堆積していた。遺物は出土しなかった。

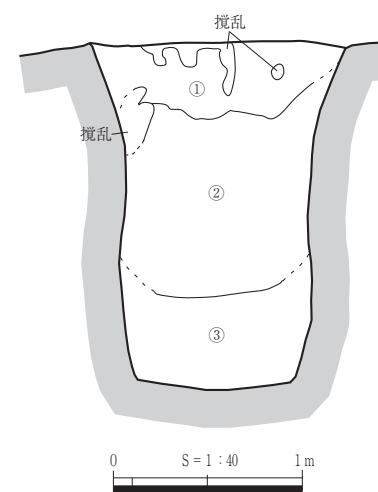
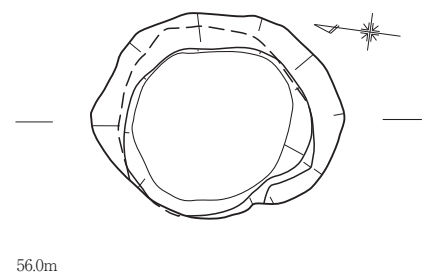
掘り込みの形状や埋土から縄文時代の落とし穴と考える。

### SK84(第11図、P L . 2)

X4グリッドの中央東端、標高56.1mの平坦地に位置する。にぶい黄褐色土上面で、褐色土の円形の広がりを検出した。

平面形は円形、径は0.90~0.98mで、底面のほぼ中央に径0.20~0.24mの底面ピットを伴う。検出面からの深さは1.28m、底面ピット底までを含めると1.71mを測る。埋土は7層に分けられ、褐色から暗褐色系と黒褐色系の土が互層に堆積する。

遺物は出土していない。底面ピットから採取した炭化物について、放射性炭素年代測定を実施し(第7節、試料No.12)、縄文時代後期中葉との結果(3400±20yrBP-IAAA-112266)を得た。形態的な特徴や埋土、放射性炭素年代測定結果から縄文時代後期



- ①黒色土(10YR1.7/1)粘性強い。しまりやや強い。
- ②黒色土(10YR2/1)粘性強い。しまりやや弱い。
- ③褐灰色土(10YR4/1)粘性強い。しまり強い。

第10図 SK83

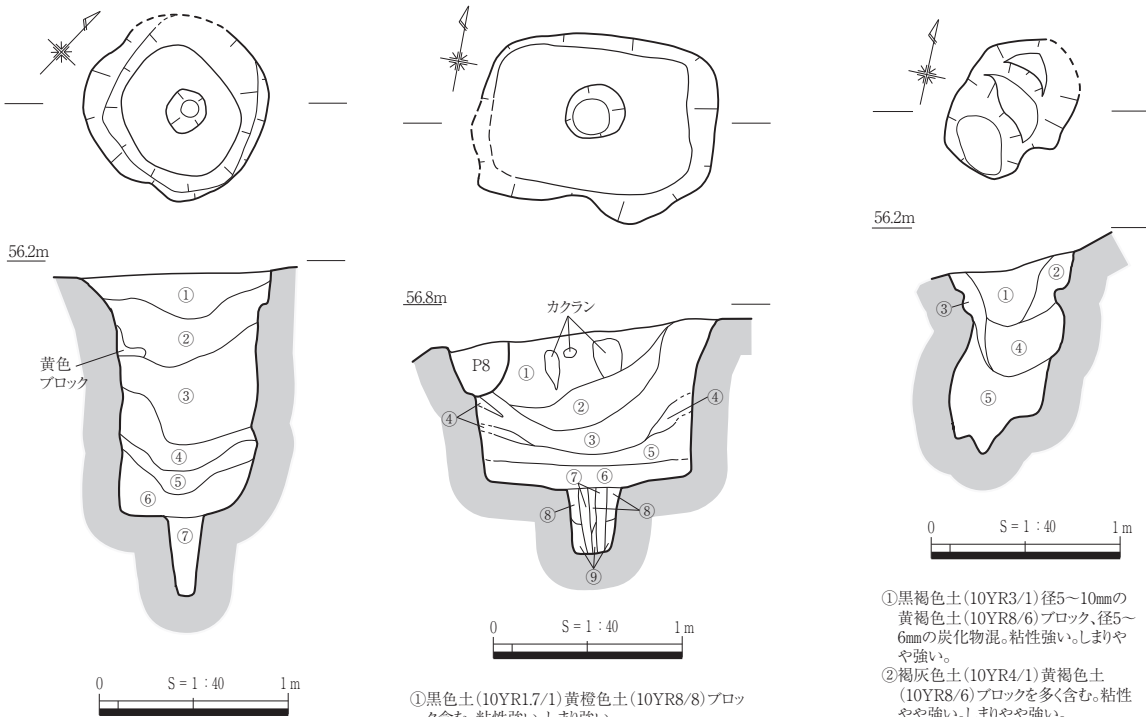
中葉の落とし穴と考える。

SK85(第12図、P L . 2)

W6グリッド中央東端、標高56.6~56.7mの北西向き緩斜面上に位置する。西際以西は町道敷設時の掘削で破壊され、西側の一部は古代の掘立柱建物跡SB20の柱穴に切られている。地山上面で、不整な長方形の黒色土の広がりを検出した。

平面形は長方形、長軸1.22m、短軸0.97mで、ほぼ中央に径0.28~0.32mの底面ピットを伴う。検出面からの深さは0.83m、底面ピット底までを含めると1.17mを測る。埋土は9層に分けられ、黒褐色系と明黄褐色系の土が互層に堆積する。底面ピットの断面に2本の杭の痕跡とみられるにぶい黄橙色土(⑦層)の立ち上がりを確認した。この杭痕跡の径は最大7cmを測る。

遺物は出土していない。底面ピットから採取した炭化物について、放射性炭素年代測定を実施し(第6節、試料No.13)、縄文時代後期前葉との結果(3790±30yrBP-IAAA-112267)を得た。形態的な特徴や埋土、放射性炭素年代測定結果から縄文時代後期前葉の落とし穴と考える。



- ① 褐色土(10YR4/4)径1~4mmの炭化物含む。しまりあり。粘性やや強い。
- ② 暗褐色土(10YR3/4)径1~2mmの炭化物含む。しまりややあり。粘性やや強い。
- ③ 暗褐色土(10YR3/3)径5mm程度の黄色粒少量含む。しまりややあり。粘性やや強い。
- ④ 黒褐色土(10YR3/2)しまりやや弱い。粘性やや強い。
- ⑤ 明黄褐色土(10YR6/8)しまりややあり。粘性やや強い。
- ⑥ 黒褐色土(10YR2/2)しまりやや弱い。粘性やや強い。
- ⑦ 黒褐色土(10YR1.7/1)径2~3mmの黄橙色土ブロック(10YR8/6)混じる。

第11図 SK84

- ① 黒色土(10YR1.7/1)黄橙色土(10YR8/8)ブロック含む。粘性強い。しまり強い。
- ② 明黄褐色土(10YR7/6)と黒色土(10YR1.7/1)の混じり。粘性強い。しまり強い。
- ③ 黒褐色土(10YR1.7/1)粘性強い。しまり強い。①よりブロック少ない。
- ④ 明黄褐色土(10YR7/6)と黒色土(10YR1.7/1)の混じり。粘性強い。しまり強い。ブロック状の堆積。
- ⑤ 黒褐色土(10YR1.7/1)粘性強い。しまり強い。ブロック含まず。
- ⑥ 褐色土(10YR4/1)粘性あり。しまりあり。
- ⑦ にぶい黄橙色土(10YR7/3)粘性有あり。しまりあり。杭痕跡。径2~3mmの黒色粒含む。
- ⑧ 褐色土(10YR4/1)粘性あり。しまりあり。径5~6mmのにぶい黄褐色土(10YR7/8)ブロック混じる。
- ⑨ 灰黄褐色土(10YR5/2)粘性あり。しまりあり。ブロックなし。

第12図 SK85

- ① 黒褐色土(10YR3/1)径5~10mmの黄褐色土(10YR8/6)ブロック。径5~6mmの炭化物混。粘性強い。しまりやや強い。
- ② 褐色土(10YR4/1)黄褐色土(10YR8/6)ブロックを多く含む。粘性やや強い。しまりやや強い。
- ③ 褐色土(10YR4/1)径5~10mmの黄褐色土(10YR8/6)ブロックを多く含む。径5~6mmの炭化物を含む。
- ④ 褐色土(10YR4/1)ブロック含まず。粘性やや強い。しまりやや強い。
- ⑤ 褐色土(10YR4/1)径5~6mmの黄褐色土(10YR8/6)ブロックを含む。粘性強い。しまり強い。

第13図 SK86

SK86(第13図、P L . 2)

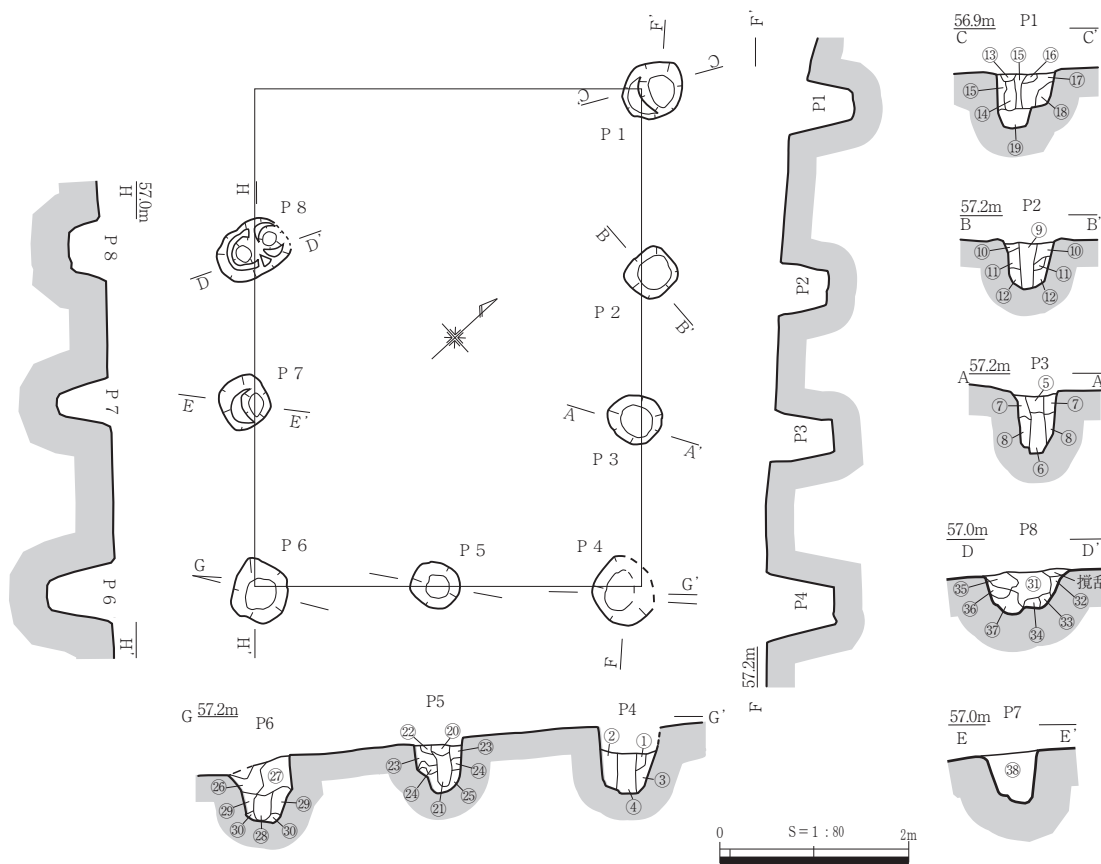
X 3 グリッド中央南端、標高55.9~56.1mの北西向きの緩斜面上に位置する。にぶい黄褐色土上面で不整な黒褐色の楕円形状の広がりを検出した。

平面形は不整な楕円形で、長軸0.80m、短軸0.58m、断面は凹凸が大きな不整形で深さは0.22~0.35mを測る。断面形状が特に不整形であるが、地山を掘り込んでおり、黒褐色から褐灰色の埋土が底ま

表2 縄文時代土坑一覧

<>内は底面ピット深さ

遺構名	平面形	上面径 (cm)	底面径 (cm)	底面ピット径 (cm)	深さ計 (cm)	備考
SK83	円	108 ~ 135	86 ~ 95	-	183	落とし穴
SK84	円	90 ~ 98	57 ~ 76	20 ~ 24	171<43>	落とし穴
SK85	長方形	97 × 122	73 × 102	28 ~ 32	117<34>	落とし穴
SK86	楕円	58 ~ 80	22 ~ 35	-	105	不明



- ① 淡黄褐色土 (7.5YR4/6) 粘質。地山ブロック土と暗灰。柱掘方。
- ② 明褐色土(7.5YR4/4) 粘質。微砂含む。柱掘方。
- ③ 黄褐色土 (10YR4/6) 粘質。
- ④ 暗灰色土(10YR3/3) 粘質。柱痕跡。
- ⑤ 暗灰褐色土 (7.5YR3/3) 粘質。柱痕跡。
- ⑥ 淡橙褐色土(7.5YR4/4) 粘質。柱痕跡。
- ⑦ 黄褐色土 (10YR4/4) 粘質。柱掘方。
- ⑧ 淡褐色土(7.5YR5/6) 粘質。柱掘方。
- ⑨ 暗灰褐色土 (7.5YR2/3) 粘質。
- ⑩ 灰黄褐色土(7.5YR3/4) 粘質。
- ⑪ 暗橙褐色土 (10YR4/6) 粘質。地山ブロック土混じる。
- ⑫ 暗黄灰色土(7.5YR3/2) 粘質。粘質土混じる。微砂含む。
- ⑬ 明褐色土 (10YR5/6) 粘質。地山ブロック土混じる。
- ⑭ 明黄褐色土(10YR4/6) 粘質。地山ブロック土混じる。
- ⑮ 灰黄色土 (7.5YR3/2) 粘質。
- ⑯ 暗黄褐色土(7.5YR2/3) 粘質。地山ブロック土混じる。
- ⑰ 淡橙土(7.5YR5/6) 粘質。
- ⑱ 暗褐色土(10YR3/2) 砂質。
- ⑲ 灰黄褐色土(7.5YR3/3) 粘質。
- ⑳ 灰褐色土 (7.5YR2/3) 粘質。地山ブロック土混じる。柱痕跡。
- ㉑ 暗橙褐色土(10YR2/3) 粘質。砂含む。柱痕跡。
- ㉒ 茶褐色土 (7.5YR3/3) 粘質。地山ブロック土混じる。
- ㉓ 淡茶褐色土(7.5YR3/2) 砂質。炭含む。
- ㉔ 橙黄色土 (7.5YR5/6) 粘質。
- ㉕ 灰褐色土 (7.5YR2/2) 粘質。地山ブロック土混じる。
- ㉖ 暗黄灰色土 (7.5YR3/4) シルト。
- ㉗ 灰黄色土(7.5YR4/4) 粘質。
- ㉘ 暗灰褐色土 (7.5YR2/3) 砂質。柱痕跡。
- ㉙ 明橙褐色土(7.5YR5/6) 粘質。柱掘方。
- ㉚ 黒褐色土(7.5YR2/2) シルト。柱掘方。
- ㉛ ⑬にぶい黄褐色土(10YR7/4)と褐灰色土(10YR5/1)の混じり。粘性やや強い。しまり強い。
- ㉜ 褐灰色土(10YR4/1)粘性やや強い。しまり強い。
- ㉝ ⑬にぶい黄褐色土(10YR7/2)粘性やや強い。しまりやや強い。
- ㉞ 褐灰色土(10YR4/1)粘性やや弱い。もろい。
- ㉟ 褐灰色土(10YR4/1)粘性強い。しまりやや強い。
- ㊱ ⑬に比べ明黄褐色土(10YR6/6)を含む。粘性強い。しまりやや強い。
- ㊲ 明黄褐色土(10YR6/6)粘性強い。しまる。
- ㊳ 褐灰色土(7.5YR4/1)粘性強い。しまる。

第14図 SB7

で堆積していることから、木根等の攪乱ではないと判断し、縄文時代の土坑とした。

遺物は出土していない。性格は不明である。

## 第4節 古代の調査

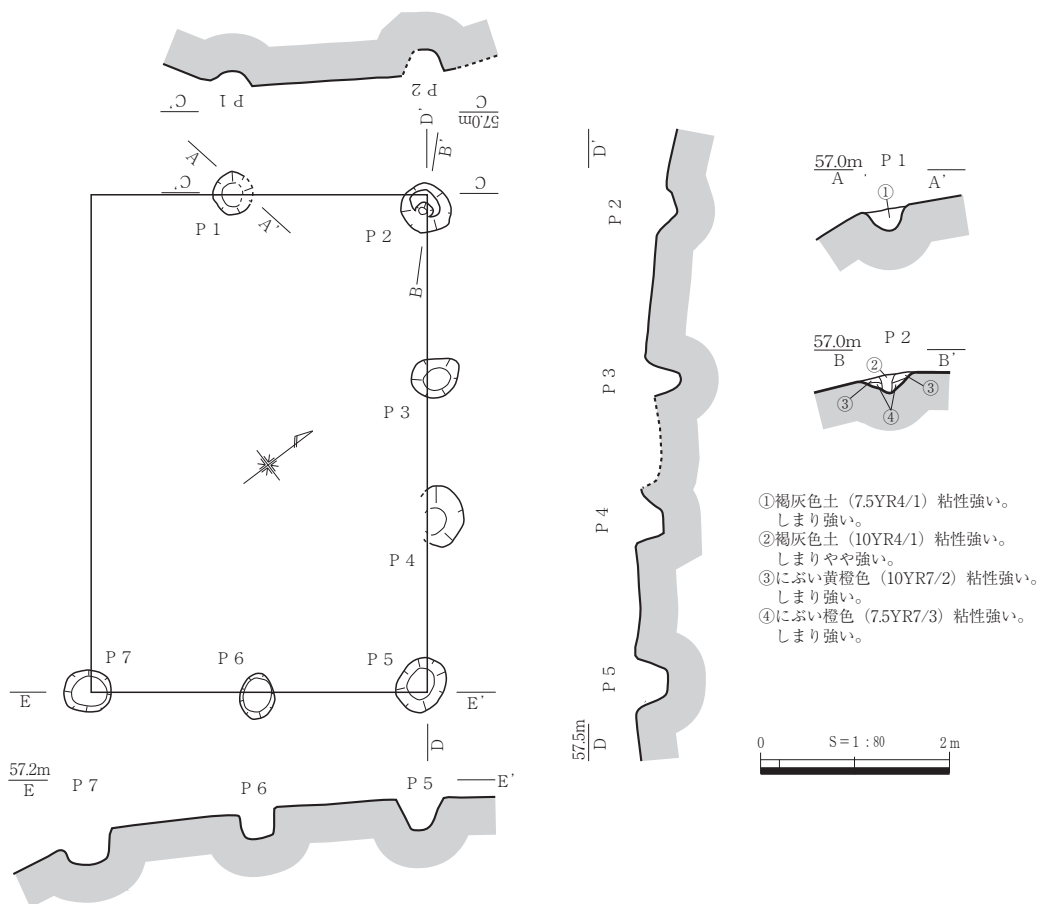
### 1 概要

古代の遺構としては、掘立柱建物跡2棟(SB7・20)、土坑4基(SK87~90)、ピット群1(P1~3)を確認した。周辺は平成21年度の調査で古代の掘立柱建物跡のほか、土坑や段状遺構などを検出している。今回確認した遺構はいずれも地山上面で検出した。灰褐色系の埋土であることから、本来は地山より上層に灰褐色系の土が堆積しており、その層から掘り込まれた遺構と推定する。掘立柱建物跡については、平成21年度調査で確認していたSB7で新たに柱穴2基(P7・P8)を検出した。また、平成21年度調査と今回検出した柱穴1基によって新規に1棟の掘立柱建物跡(SB20)を確認した。土坑・ピットは製塩土器の出土が目立ち、その他、遺構の内外から須恵器や土師器が出土している。

### 2 掘立柱建物跡

#### SB7(第14図、P.L.4)

V5グリッド中央、標高56.6~57.1mの平坦地に位置する。平成21年度の調査でP1~P6を調査し、桁行3間×梁行2間の掘立柱建物跡として検出していた。今回の調査で、新たにP7・P8を地山上面で確認した。やや軸が異なるが、西側半分程がSB20と重複する。北西側付近は町道敷設時に



第15図 SB20

### 第3章 倉谷西中田遺跡の調査

大きく掘削されており、遺構は確認できない。

桁行3間(5.3m)、梁行2間(4.1m)の北西-南東方向に主軸をもつ掘立柱建物跡で、主軸はN-38°-W、平面積は21.73㎡である。柱穴の規模は径0.25~0.72m、検出面からの深さは最大0.71mを測る。P1~P6で最大径20cmの柱の痕跡があり、暗褐から灰黄褐色の土が堆積していた。

遺物は平成21年度の調査で、P1埋土中から製塩土器1点と椀形鍛冶滓1点、P4埋土中から石鏃1点が出土している。今回調査のP7・P8から遺物は出土していない。

土器及び埋土から奈良時代の掘立柱建物跡と考える。

#### SB20(第15図、P L . 4)

V5とV6グリッドの境、標高56.7~57.0mの平坦地に位置する。南西側は町道による掘削で破壊されている。平成21年度の調査でP3~P7を調査している。今回の調査でP1・P2を地山直上で検出し、新たに掘立柱建物跡1棟を確認した。

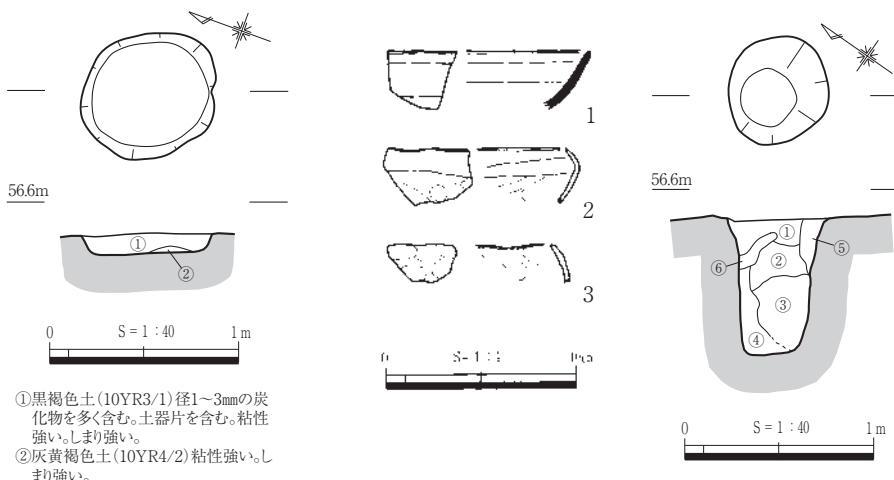
桁行3間(5.25m)、梁行2間(3.58m)の北西-南東方向に主軸をもつ掘立柱建物跡で、主軸はN-53°-W、平面積は18.795㎡である。やや軸が異なるが、東側半分程がSB7と重複する。柱穴の規模は径0.18~0.32m、検出面からの深さは最大0.17mを測る。P2には径9cmの柱の痕跡があり、褐灰色土が堆積していた。

遺物は出土していない。埋土から奈良時代の建物跡と考える。

### 3 土坑

#### SK87(第16図、P L . 3・6)

W5グリッド中央北、標高56.4mの平坦地にあり、南西隣にSK88が位置する。地山上面で黒褐色



- ①黒褐色土(10YR3/1)径1~3mmの炭化物を多く含む。土器片を含む。粘性強い。しまり強い。
- ②灰黄褐色土(10YR4/2)粘性強い。しまり強い。

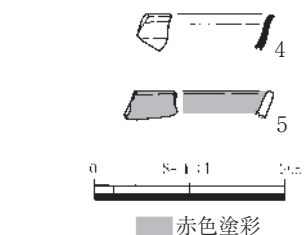
第16図 SK87及び出土遺物

表3 SB7ピット一覧

番号	径 (cm)	深 (cm)	柱痕径 (cm)
P 1	58~67	60	12
P 2	50	53	18
P 3	50~56	67	16
P 4	65~72	71	20
P 5	47~53	52	15
P 6	58~63	66	18
P 7	25~27	28	-
P 8	28~40	22	-

表4 SB20ピット一覧

番号	径 (cm)	深 (cm)	柱痕径 (cm)
P 1	23	7	-
P 2	25~28	12	9
P 3	20~27	15	-
P 4	32	12	-
P 5	24~29	17	-
P 6	18~24	14	-
P 7	22~25	15	-



- ①黒褐色土(10YR3/1)に黄褐色土(10YR4/3)ブロックを多く含む。径2~3mmの炭化物を含む。粘性強い。しまり強い。
- ②褐灰色土(10YR4/1)粘性強い。しまり強い。
- ③褐灰色土(10YR4/1)径5mmの暗黄褐色土(10YR6/6)ブロックを多く含む。粘性強い。しまり強い。
- ④褐灰色土(10YR4/1)③よりもブロック多く含む。粘性強い。しまり強い。
- ⑤褐灰色土(10YR6/1)と明黄褐色土(10YR6/6)がブロック状に混じる。粘性強い。しまり強い。
- ⑥に黄褐色土(10YR4/3)と黒褐色土(10YR3/1)がブロック状に混じる。粘性強い。しまり強い。

第17図 SK88及び出土遺物



土の円形の広がりを検出した。

平面形は円形で径0.65～0.76m、検出面からの深さは0.11mを測る。埋土は2層に分けられ、黒褐色土を主体とし、径1～3mmの炭化物が含まれていた。埋土中から土器片が出土した。

図化した土器は、須恵器の坏(1)、製塩土器(2・3)である。いずれも奈良時代の所産であることから、土坑の廃絶時期もこの時期と考える。遺構の性格は、廃棄土坑と考える。

**SK88**(第17図、P L . 3・6)

W5グリッド中央北、標高56.4mの平坦地に位置にあり、北東隣にSK87が位置する。地山上面で黒褐色土の円形の広がりを検出した。

平面形は円形で径0.53～0.59m、検出面からの深さは0.73mを測る。埋土は6層に分層でき、上層は黒褐色土、中層以下は褐灰色土を主体とする。埋土から土器片が出土した。

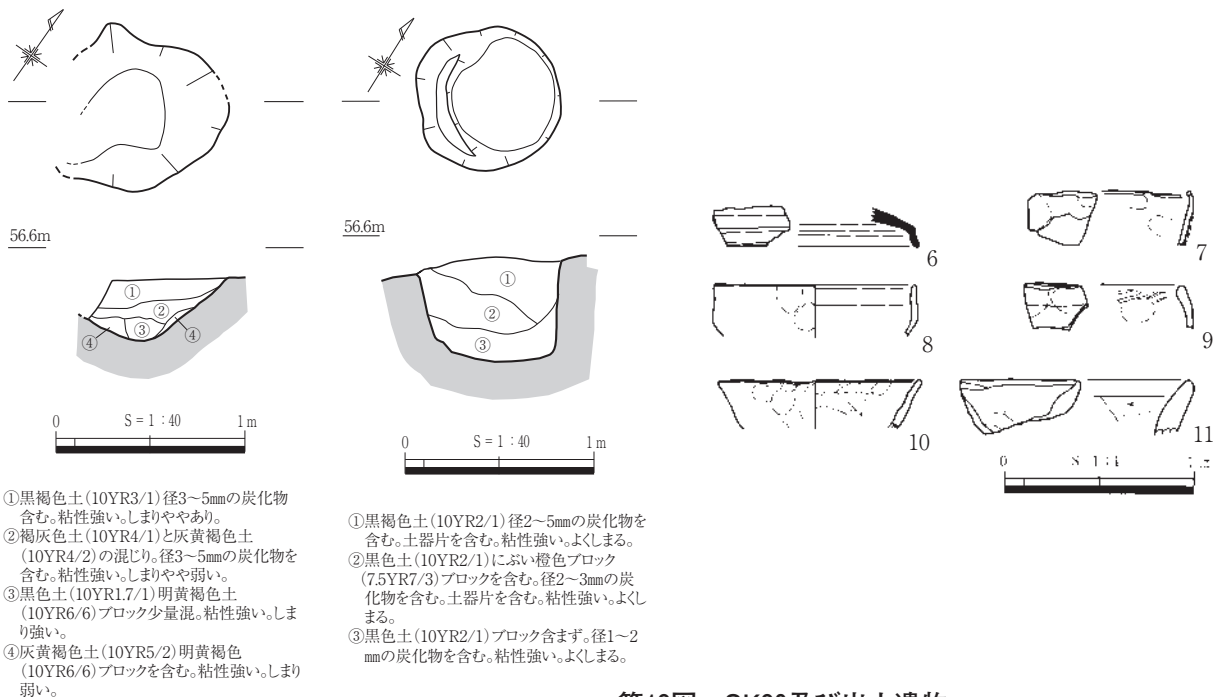
図化した土器は、須恵器の坏(4)、内外面赤色塗彩された土師器の皿(5)である。製塩土器は出土していない。いずれも奈良時代の所産であることから、土坑の廃絶時期もこの時期と考える。掘り込みの形状や遺物から柱跡ともみられるが、対応する遺構がないため性格は不明である。

**SK89**(第18図、P L . 4)

W5グリッドほぼ中央、標高56.5mの平坦地に位置する。西側を町道による掘削で破壊されている。地山上面で黒褐色土の不整な広がりを検出した。

平面形は不整形で、短軸0.77m、検出面からの深さは0.33mを測る。埋土は4層に分層でき、上層は黒色土、中～下層は褐色系の土と黒色土が混在する。中～上層である①・②層には径3～5mmの炭化物が含まれていた。埋土から土師器小片が出土した。

土器は小片のため図化していないが、埋土から奈良時代の土坑と考える。性格は不明である。



第19図 SK90及び出土遺物

第18図 SK89

SK90(第19図、P L. 3・6)

W5グリッドの中央南端、標高56.5mの平坦地に位置する。西際以西は生活道による掘削で破壊されている。地山上面で黒褐色土の円形の広がりを検出した。

平面形は円形で、径0.74m、検出面からの深さは0.56mを測る。埋土は3層に分層でき、黒から黒褐色土を主体とする。埋土には1～5mmの炭化物と土器片が出土した。

図化した土器は、須恵器の蓋(6)、製塩土器(7～10)、土師器の甕(11)である。いずれも奈良時代の所産であることから、土坑の廃絶時期もこの時期と考える。遺構の性格は、廃棄土坑と考える。

表5 古代の土坑一覧

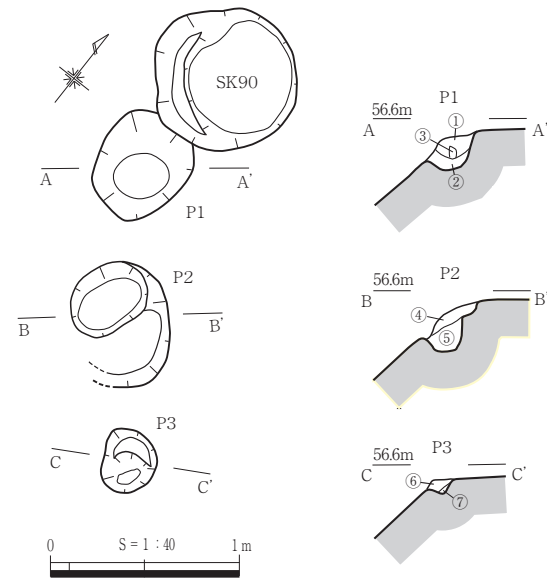
遺構名	平面形	上面径(cm)	底面径(cm)	深さ(cm)
SK87	円形	65～76	56～63	11
SK88	円形	53～59	28	73
SK89	不整形	77	48	33
SK90	円形	74	53	56

ピット群1(第20図)

W5～6グリッドの境、標高56.5mの平坦地に位置する。SK90の南東側にP1～P3が連続する。西側は生活道でいずれのピットも西側は掘削されている。地山上面及び西側面で褐灰色土の広がりを検出した。

平面形はいずれも楕円形で、長軸0.34～0.55m、短軸0.28～0.48m、検出面からの深さは最大で0.20mを測る。埋土はいずれも褐灰から灰黄褐色土を主体とする。埋土から土器片が出土した。

P1埋土から製塩土器(12)、P2埋土から製塩土器(13)及び土師器甕(14)、P3埋土から製塩土器(15)が出土している。いずれも奈良時代の所産であり、ピット群もこの時期と考える。

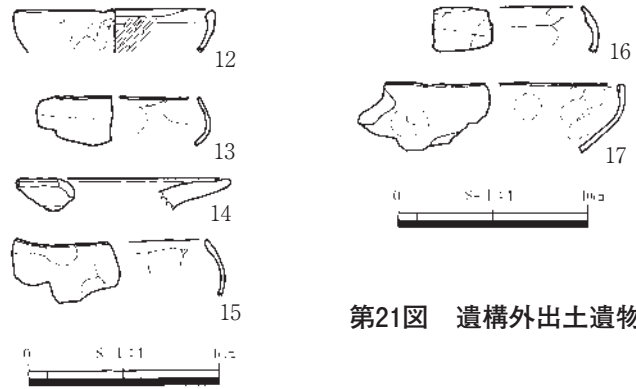


- ① 褐灰色土(10YR4/1)ブロック含まず。粘性弱い。しまり弱い。
- ② 灰黄褐色土(10YR4/2)粘性弱い。しまり弱い。
- ③ にぶい黄橙色土ブロック(10YR7/3)粘性弱い。しまり弱い。
- ④ 褐灰色土(10YR5/1)径1～2mmの炭化物混。粘性あり。しまり弱い。
- ⑤ 褐灰色土(10YR4/1)④より暗い。粘性弱い。しまりやや弱い。
- ⑥ 褐灰色土(10YR4/1)にぶい褐色(7.5YR5/3)ブロック少量混。径2～3mmの炭化物少量混。粘性強い。しまり強い。
- ⑦ にぶい褐色(7.5YR5/3)ブロック含まず。粘性弱い。しまり強い。

第20図 ピット群1及び出土遺物

表6 ピット群1一覧

番号	径 (cm)	深 (cm)
P 1	46～55	19
P 2	48～65	20
P 3	28～34	8



第21図 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物(第21図、P L . 6)

W5～6グリッド付近には一部であるが黒褐色土が遺存しており、ここから土器片が出土した。  
 図化したのは製塩土器(16・17)で、奈良時代の所産である。

第5節 中世以降の調査

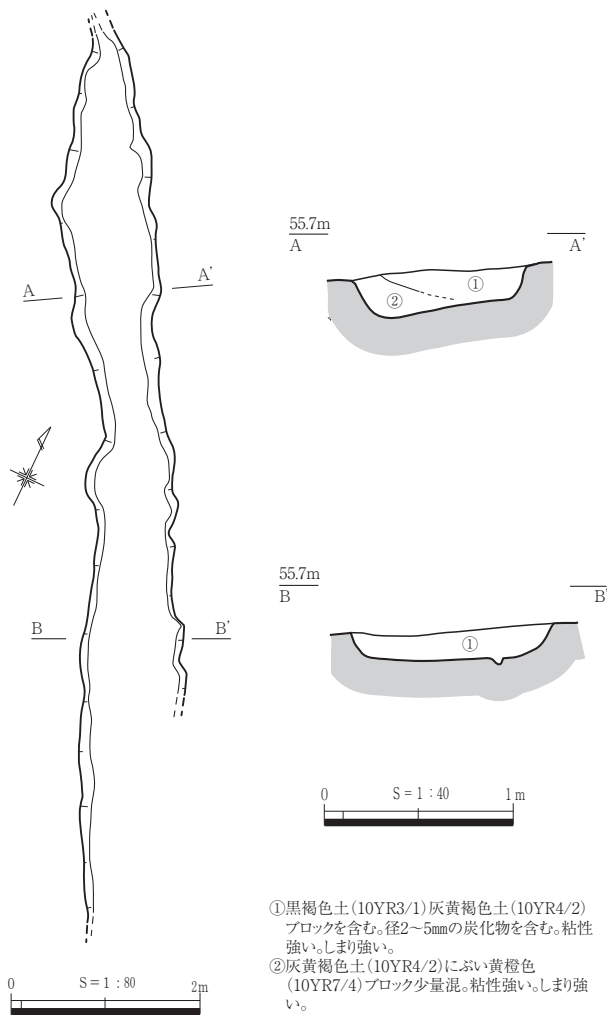
1 概要

本年度の調査では平成21年度に調査が行われた道路状遺構(SX1)の北側と、近世以降の土坑(SK91)を検出した。周辺は方形に区画されたとみられる居館の西側にあたり、平成21年度の調査ではⅡ期(15世紀から16世紀前半)の堀SD1に並行する延長部分である。

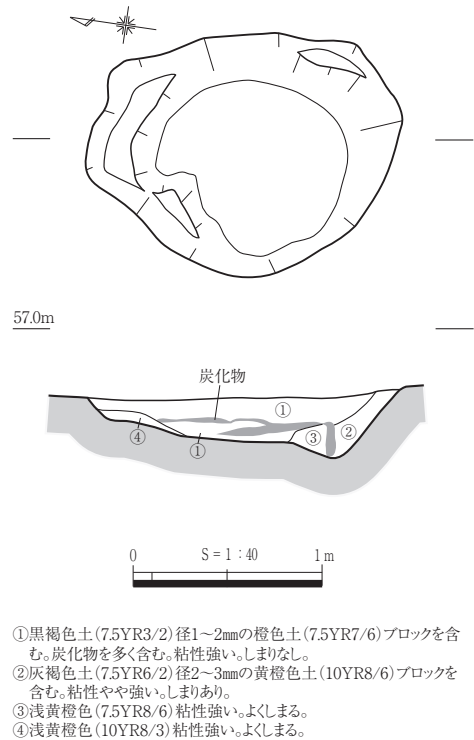
2 遺構

SX1(第22図、P L . 5)

X2グリッド中央から南東にかけて、標高55.4～55.5mの北西向きの緩斜面上に位置する中世の道路状遺構である。平成21年度の調査で遺構の南東側を調査しており、今回検出したのはこの延長にあたる。



第22図 SX1



第23図 SK91

### 第3章 倉谷西中田遺跡の調査

にぶい黄褐色土上面で、黒褐色～灰黄褐色土の帯状の広がりとして検出した。最大幅1.12m、最長9.18m、検出面からの最大の深さは0.23m、主軸はN-28°-Wである。

遺構の底面に道路状遺構特有の波板状圧痕や小礫、硬化面等は確認していない。前回検出された遺構と比較すると、今回は東側の限られた幅のみで検出した。検出面が波板状圧痕を検出した標高55.75mよりも低いことから、遺構の北西側については削平が及んでおり、遺存していないためと考える。埋土や周辺から遺物はしていない。

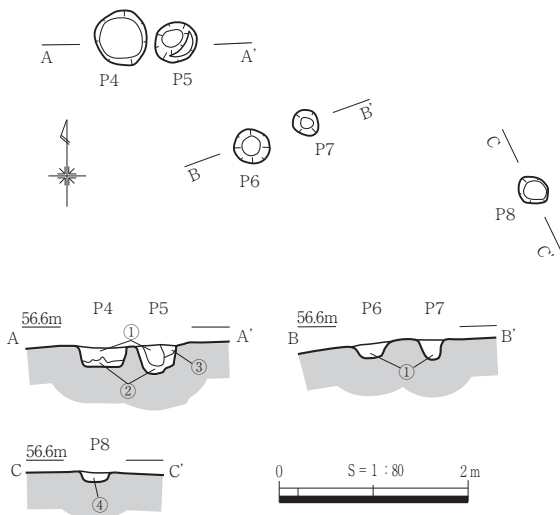
#### SK91(第23図、P L. 6)

X3グリッドの中央やや東、標高56.7mの平坦地に位置する。周辺は地山の上になぶい黄褐色土が遺存しており、この層の上面で炭化物を含む黒褐色土の円形の広がりを検出した。

平面は不整な円形で、径1.28~1.69m、検出面からの深さは最大0.36mを測る。埋土は4層に分層でき、しまりがなく、炭化物や黄橙色土ブロックを含む黒褐色土が主体である。焼土は含まれていない。遺物は埋土から近世に下る磁器の小片が出土した。

表7 近世以降の土坑一覧

遺構名	平面形	規模 (cm)	深さ (cm)	底面規模 (cm)
SK91	不整円	128 ~ 169	36	82 ~ 98



- ①黒褐色土(10YR3/1)径1~2mmの炭化物を含む。粘性強い。しまり強い。
- ②灰黄褐色土(10YR4/2)と明黄褐色土(10YR6/6)の混じり。粘性強い。しまり強い。
- ③褐灰色土(10YR4/1)径5~10mmの明黄褐色土(10YR6/6)ブロックを含む。径3~4mmの炭化物を含む。粘性強い。しまり強い。
- ④褐灰色土(10YR4/1)径1~2mmの炭化物を含む。粘性強い。しまり強い。

第24図 ピット群2

表8 時期不明のピット一覧

番号	径 (cm)	深 (cm)	備考
P 4	27 ~ 29	10	ピット群2
P 5	21 ~ 24	15	ピット群2
P 6	19	8	ピット群2
P 7	14 ~ 15	11	ピット群2
P 8	15 ~ 18	5	ピット群2
P 9	38 ~ 49	53	-

時期は出土遺物や埋土から近世以降、性格は不明である。

#### 第6節 時期不明の遺構

##### 1 概要

出土遺物がなく、埋土の状況のみでは時期を特定することができない遺構(ピット群2、及びP9)について、時期不明の遺構として扱う。いずれの遺構からも遺物は出土していない。

##### 2 遺構

#### ピット群2・P9(第24図)

W5グリッド中央北側、標高56.5mの平坦地に、P4・P5、1m程南東にP6・P7、2.2m程南東にP8が位置する。P4~P7の間には、古代の土坑SK87・88がある。いずれも地山上面で黒褐色土から褐灰色土の円形の広がりを検出した。

平面形はいずれも不整な円形で、径0.14~0.29m、検出面からの深さは最大で0.15mである。埋土はP4~P7は黒褐色土を主体とするが、P8は褐灰色土の単層である。

遺物は出土していない。埋土からP4~P7は

古代の遺構の可能性もある。

これらのほかに、X3グリッドのほぼ中央から、にぶい黄褐色土上面で暗褐色土を埋土とするP9を検出した。埋土上面から径20cm程度の円礫が出土したが使用された痕跡はない。埋土はしまりが弱く、遺物も出土していない。

表9 出土土器観察表

遺物 番号	取上 番号	遺構 地区 層位名	挿図 PL	種類 器種	法量 (cm)	手法上の特徴	胎土	焼成	色調
1	15	SK87 埋土中	第16図 PL.6-4	須恵器 坏	器高:△3.0	内外面:回転ナデ。	密(0.5~1mmの長石・ 石英を多く含む)	良好	内外面:灰色
2	4	SK87 埋土中	第16図 PL.6-4	製塩土器 焼塩土器	器高:△2.9	内外面:手づくね成形。口縁端部付近横方向のナ デ。	密(0.5~1mmの石英・ 砂粒を含む)	良	外面:浅黄色 内面:浅黄色~灰黄色
3	4	SK87 埋土中	第16図 PL.6-4	製塩土器 焼塩土器	器高:△2.1	内外面:手づくね成形。	密	良	内外面:褐色
4	18	SK88 埋土中	第17図 PL.6-4	須恵器 坏	器高:△1.9	内外面:回転ナデ。	密	良好	内外面:灰色
5	18	SK88 埋土中	第17図 PL.6-4	土師器 皿	器高:△1.3	内外面:ヨコナデ。赤色塗彩。	密	良好	内外面:浅基橙色~明 赤褐色
6	13	SK90 埋土中	第19図 PL.6-4	須恵器 蓋	器高:△2.4	内外面:回転ナデ。	密	良好	内外面:灰色
7	21	SK90 ③層	第19図 PL.6-4	製塩土器 焼塩土器	器高:△2.9	内外面:手づくね成形。	密(0.2~1mmの長石・ 石英を多く含む)	良好	内外面:明黄褐色
8	6	SK90 上層(黒 褐色土)	第19図 PL.6-4	製塩土器 焼塩土器	口径:※10.4 器高:△2.8	外面:手づくね成形。 内面:横方向のナデ。	密(0.1mmの長石・石 英・砂粒を含む)	良好	内外面:明黄褐色
9	21	SK90 ③層	第19図 PL.6-4	製塩土器 焼塩土器	器高:△2.3	外面:手づくね成形。 内面:手づくね成形。工具の圧痕あり。	密(0.3~0.5mmの長石・ 石英を含む)	良好	内外面:灰黄褐色
10	13	SK90 埋土中	第19図 PL.6-4	製塩土器 焼塩土器	口径:※10.5 器高:△2.5	内外面:手づくね成形。	密(0.1mmの長石・石英 を多く含む)	良好	内外面:橙色
11	13	SK90 埋土中	第19図 PL.6-4	土師器 甕	器高:△2.2	外面:ケズリ後不定方向のナデ。 内面:横方向のケズリ。口縁端部付近ヨコナデ。	密(0.1mmの長石・石英 を多く含む)	良好	内外面:にぶい黄褐色
12	25	P1 埋土中	第20図 PL.6-4	製塩土器 焼塩土器	口径:※10.3 器高:△2.3	外面:手づくね成形。 内面:工具の圧痕あり。ナデ。	密(長石・石英を含む)	良好	外面:にぶい橙~橙色 内面:にぶい橙色
13	27	P2 埋土中	第20図 PL.6-4	製塩土器 焼塩土器	器高:△2.6	外面:横方向のナデ。 内面:手づくね成形。	密	良好	内外面:にぶい黄褐色
14	27	P2 埋土中	第20図 PL.6-4	土師器 甕	器高:△1.7	内外面:ヨコナデ。	密	良好	内面:橙色 外面:明黄褐色
15	24	P3 埋土中	第20図 PL.6-4	製塩土器 焼塩土器	器高:△3.0	外面:手づくね成形。 内面:手づくね成形。口縁端部付近横方向のナデ。	密(0.2~0.5mmの長石・ 石英を含む)	良	内外面:にぶい黄褐色
16	16	①層 黒褐色土	第21図 PL.6-4	製塩土器 焼塩土器	器高:△2.4	外面:手づくね成形。 内面:手づくね成形。口縁端部付近横方向のナデ。	密(0.2~0.5mmの石英を 少量含む)	良好	内外面:にぶい黄褐色
17	16	①層 黒褐色土	第21図 PL.6-4	製塩土器 焼塩土器	器高:△3.7	内外面:手づくね成形。	密(0.2~1mmの石英を 多く含む)	良	内外面:にぶい黄褐色

第7節 自然化学分析

倉谷西中田遺跡における放射性炭素年代(AMS測定)

(株)加速器分析研究所

1 測定対象試料

倉谷西中田遺跡は、鳥取県西伯郡大山町倉谷字西中田(北緯35°30'30"、東経133°31'56"付近)に所在し、中国地方最高峰の大山(標高1729m)の山系から北側に派生する標高49~61mの丘陵斜面から丘陵上に位置する。測定対象試料は、SK84底面ピット出土炭化物(No.12:IAAA-112266)、SK85底面ピット出土炭化物(No.13:IAAA-112267)の合計2点である(表10)。これらの遺構はいずれも縄文時代の落とし穴と推定されている。

試料はすべて調査現場にて遺構埋土として採取され、後に水洗選別によって土の中から炭化物が取り出された。試料の状態と採取に関するデータを表1に、写真を文末の図版に示した。

表10 測定対象試料

測定番号	試料名	試料形態	採取位置・量	色調	状態	付着物	残試料	備考
IAAA-112266	No.12	炭化物	炭化物 7×5×1mm以下20個のうち、大きい2個を採取。	黒色	やや湿	なし	あり	調査現場で遺構埋土として採取。後に水洗選別で炭化物を抽出。
IAAA-112267	No.13	炭化物	炭化物 3×3×2mm 1個、3×2×1mm以下3個のうち、前者を採取。後者は光沢がある。	黒色	乾	なし	あり	調査現場で遺構埋土として採取。後に水洗選別で炭化物を抽出。

2 測定の意義

遺跡内の落とし穴の時期を明らかにする。さらに遺跡内で特徴の異なる落とし穴の時期を比較し、時期ごとの様相を検討する。

3 化学処理工程

- (1)メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2)酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1 mol/l (1 M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1 Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1 Mに達した時には「AAA」、1 M未満の場合は「AaA」と表2に記載する。
- (3)試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)を発生させる。
- (4)真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5)精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- (6)グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

## 4 測定方法

加速器をベースとした<sup>14</sup>C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、<sup>14</sup>Cの計数、<sup>13</sup>C濃度(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)、<sup>14</sup>C濃度(<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

## 5 算出方法

(1)  $\delta^{13}\text{C}$  は、試料炭素の<sup>13</sup>C濃度(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(表11)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

(2) <sup>14</sup>C年代(Libby Age : yrBP)は、過去の大気中<sup>14</sup>C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0 yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。<sup>14</sup>C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表11に、補正していない値を参考値として表12に示した。<sup>14</sup>C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、<sup>14</sup>C年代の誤差( $\pm 1\sigma$ )は、試料の<sup>14</sup>C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

(3) pMC(percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の<sup>14</sup>C濃度の割合である。pMCが小さい(<sup>14</sup>Cが少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(<sup>14</sup>Cの量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表11に、補正していない値を参考値として表12に示した。

(4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の<sup>14</sup>C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の<sup>14</sup>C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、<sup>14</sup>C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差( $1\sigma = 68.2\%$ )あるいは2標準偏差( $2\sigma = 95.4\%$ )で表示される。グラフの縦軸が<sup>14</sup>C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下一桁を丸めない<sup>14</sup>C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal09データベース(Reimer et al. 2009)を用い、OxCalv4.1較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表12に示した。暦年較正年代は、<sup>14</sup>C年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」)という単位で表される。

## 6 測定結果

炭化物の<sup>14</sup>C年代は、SK84底面ピット出土のNo.12が $3400 \pm 20\text{yrBP}$ 、SK85底面ピット出土のNo.13が $3790 \pm 30\text{yrBP}$ である。暦年較正年代( $1\sigma$ )は、No.12が1743~1683cal BCの範囲、No.13が2284~2146cal BCの間に3つの範囲で示され、No.12が縄文時代後期中葉頃、No.13が後期前葉頃に相当する。

なお、No.13の $\delta^{13}\text{C}$ 値は $-12.03 \pm 0.58$ で、C4植物や海産物などの範囲に含まれる。海産物であれば海洋リザーバー効果によって年代値が古く見積もられている可能性があるため、測定された炭素の由来に注意する必要がある。

### 第3章 倉谷西中田遺跡の調査

試料の炭素含有率はいずれも60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

表11 測定結果(1)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age(yrBP)	pMC(%)
IAAA-112266	No.12	遺構: SK84 底面ピット 層位: ⑦層	炭化物	AAA	-26.20 ± 0.43	3,400 ± 20	65.45 ± 0.20
IAAA-112267	No.13	遺構: SK85 底面ピット 層位: ⑦~⑨層	炭化物	AaA	-12.03 ± 0.58	3,790 ± 30	62.39 ± 0.23

[#4824]

表12 測定結果(2)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
	Age(yrBP)	pMC(%)			
IAAA-112266	3,420 ± 20	65.29 ± 0.19	3,404 ± 24	1743calBC - 1683calBC (68.2%)	1754calBC - 1629calBC (95.4%)
IAAA-112267	3,580 ± 30	64.06 ± 0.22	3,789 ± 29	2284calBC - 2248calBC (26.9%) 2234calBC - 2196calBC (25.3%) 2170calBC - 2146calBC (16.0%)	2335calBC - 2324calBC (0.9%) 2307calBC - 2135calBC (94.5%)

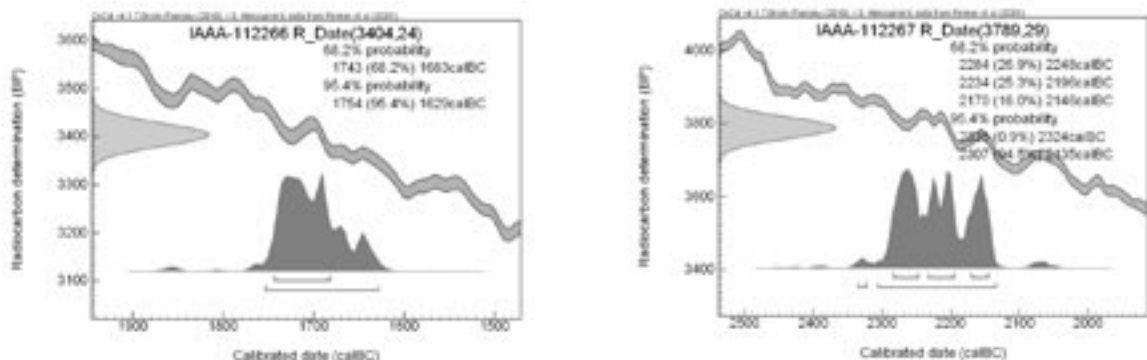
[参考値]

#### 文献

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of  $^{14}\text{C}$  data, Radiocarbon 19(3), 355-363

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360

Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 51(4), 1111-1150



第25図 暦年較正年代グラフ



No.12



No.13

写真1 測定対象試料



## 第8節 倉谷西中田遺跡の総括

今回の調査は平成21年度に比べ調査面積もごくわずかであり、これまでの評価を大きく更新することはないが、2区内では製塩土器の出土が目立っており、平成21年度成果とも併せ良好な資料を得られた。ここでは課題としてあげられていた落とし穴の様相や古代の掘立柱建物跡について整理し、製塩土器について検討することで総括とする。

## 1. 落とし穴について(第26図)

今回の調査で、落とし穴を3基検出した(SK83・SK84・SK85)。落とし穴は、平成21年度調査において計28基を検出しており、特に2区を挟んだ1区及び3区西側でそのうち16基を検出している。平成21年度調査報告では、落とし穴を4種に分類した上で、列状に配列していることを指摘し、今回の調査によって1区から3区にかけての配列の仕方や放射性炭素年代測定による時期決定、時期と形態的差異の関連性を明らかにすることを課題点として挙げている。ここでは、平成21年度調査の整理に今年度調査成果を加えて、1～3区における落とし穴についてあらためて総括する。

落とし穴の分類については、平成21年度の分類を今回も継承して検討する。分類は以下のとおりである。

- A類：円形+底面ピットなし
- B類：円形+底面ピットあり
- C類：長方形(楕円形)+底面ピットなし
- D類：長方形(楕円形)+底面ピットあり

今回調査で検出した落とし穴は、SK83がA類、SK84がB類、SK85がD類であり、それぞれ特徴を異にする。なお、今回行った放射性炭素年代測定では、SK84が縄文時代後期中葉、SK85が縄文時代後期前葉との結果を得ている。配列については整理すると、SK85は平成21年度調査のSK23、SK27に連なる位置であり、同じくD類であることから、一連の遺構と推測する。SK83、SK84については周囲に関連づけられそうな落とし穴はない。1区に近い位置は町道によって深く削平されており、たとえかつて存在していても完全に失われていると考えられ、この範囲における有無については不明である。

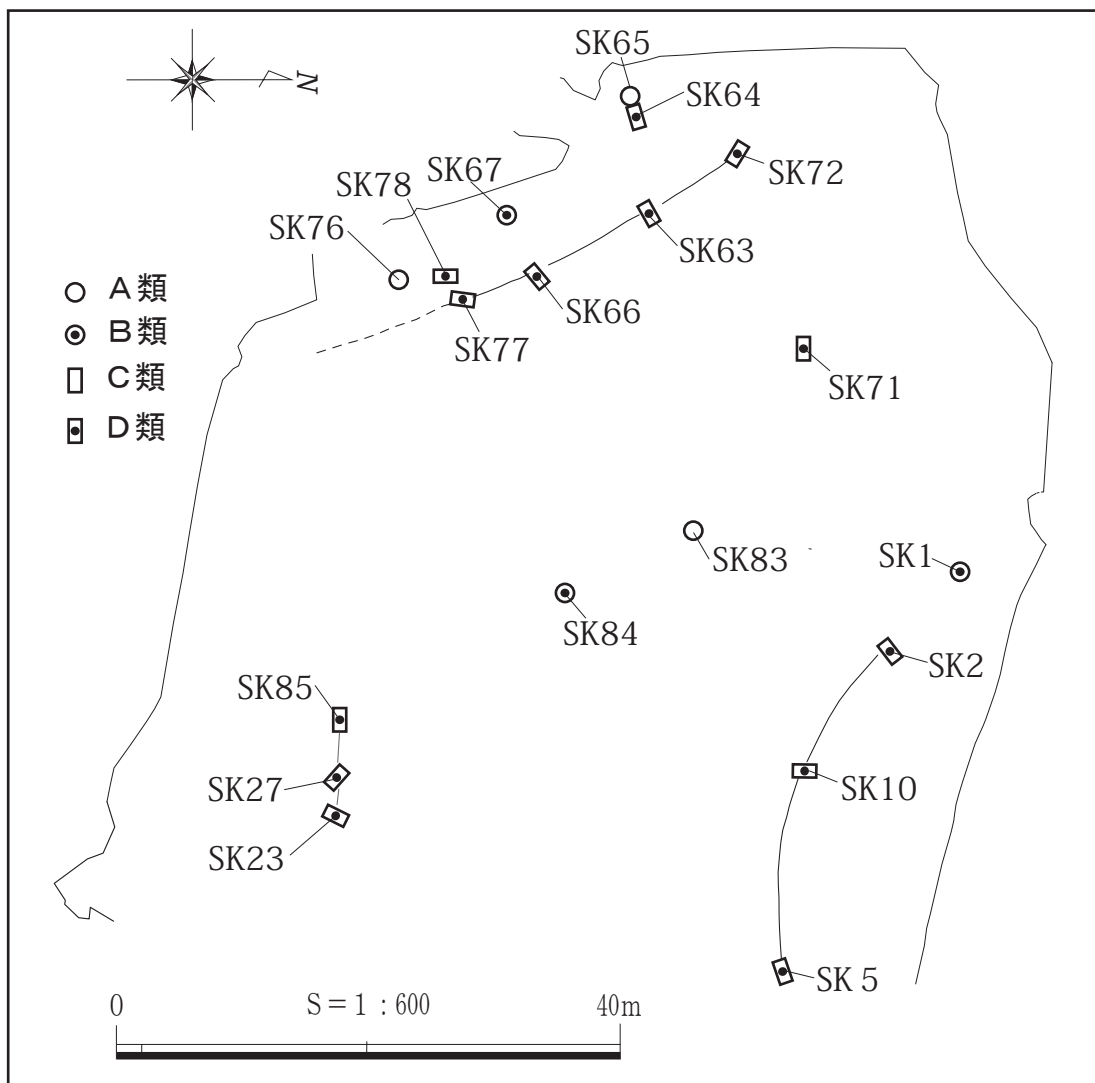
以上の諸点を踏まえて2区の落とし穴について整理する。配列については、平成21年度調査で予想されたSK23・SK27が対になる配列はみられず、SK85を含めた東西方向の列が認められる。SK83・SK84については周囲に関連しそうな落とし穴がみられず、A類(SK83)、B類(SK84)と互いに異なった特徴であり、D類であるSK85とも異なることから、列状の分布とは考えにくい。

形態差と時期の問題については、今年度の放射性炭素年代測定結果を形態変化の時期差と仮定した場合、D類(縄文時代後期前葉)からB類(縄文時代後期中葉)へと変化していることがわかる。また、1区のSK64(D類)とSK65(A類)の切り合いからSK65(A類)→SK64(D類)という順序が明らかになっており、これを踏まえると、落とし穴の形態はA類→D類→B類と変遷している可能性がある。落とし穴の形態変遷について、大山町小竹所在の小竹上鷹ノ尾遺跡でも、①平面が円形で底面ピットを伴わないもの(縄文時代早期末から前期初頭、本稿A類)→②平面が方形で底面ピットを伴うもの(縄文時代中期後葉、本稿D類)→③平面が円形で底面ピットを伴うもの(縄文時代後期中葉、本稿B類)

へと変遷する状況がみられ、同様の変遷を示しているのは興味深い。

形態が同じものを同時期と仮定した場合、平成21年度で想定した列を結ぶことができず、特に1区のB類とD類を分離することになる。だが、B類とした落とし穴のうち、SK5・SK63・SK72・SK78は下場の平面形を重視すると方形を指向していると判断することもでき、D類については列状の配置がなされていたものと考え。A類・B類については、判然とせず、列状でない原理で分布していた可能性もあるだろう。

以上のことから、倉谷西中田遺跡1～3区では、落とし穴は大きくA類→D類→B類の3段階に変遷する可能性がある。平成21年度調査で検討された2列配置については明瞭に認められず、D類が列状に配置されていると考える。



第26図 1～3区落とし穴分布

## 2. 古代の建物配置について(第27図)

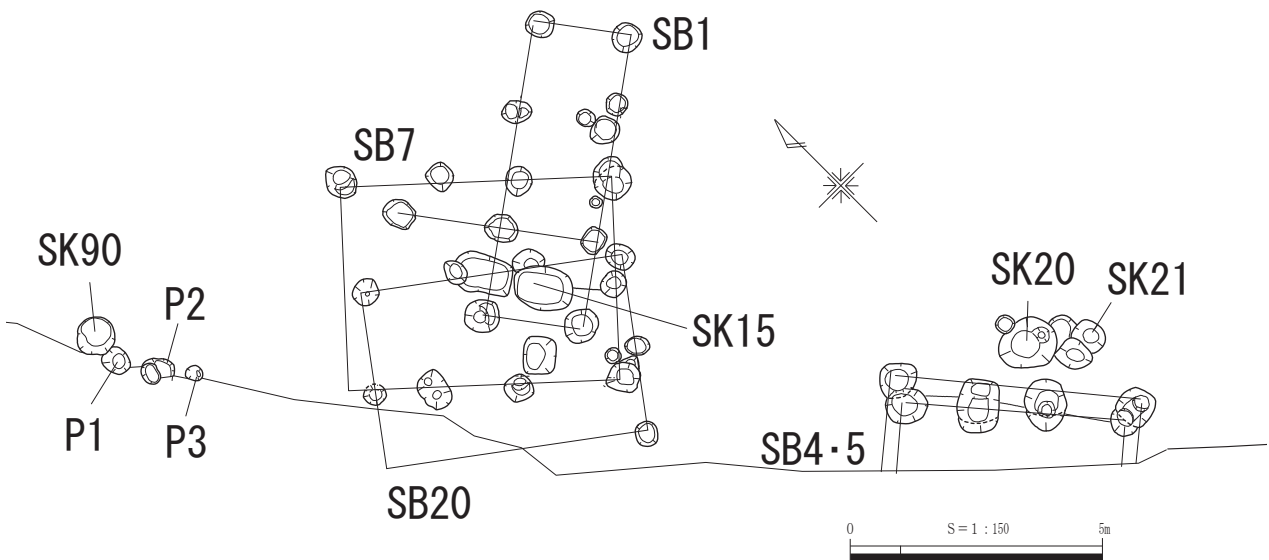
本年度の調査において、1区と3区の間には挟まれた2区から古代の土坑4基とピット6基を確認した。SB7ではP6の北西側に連続してP7・P8を確認し、埋土からも同一遺構であることを確認した。また、SB20は、今年度の調査でピットを検出したことにより、新たに掘立柱建物跡1棟を確認した。

周辺の遺構の状況は、新たに建物跡は増えたものの、SB4・5については、ほぼ同一箇所やや主

軸が振れながら重複していることから、建て直しが考えられる。一方、SB1、SB7、SB20については主軸が異なることから規則性は認めがたい。ただし軸が揃い、並存する可能性のあるものも認められる。SB7はN-38°-W、SB4・5はN-48°-E・N-51°-Eで、東西・南北棟の違いはあるものの、近似する軸をもち、6m程離れているため重複する関係にもあたらない。

掘立柱建物跡の規模についてみると、柱の掘り方は大きなものではなく、緩い地形をそのまま利用して柱を立てている。

さらに遺物については、製塩土器の出土した土坑やピットがいずれも掘立柱建物跡群の北西側に隣接している。遺物の組成は、遺構内外全ての出土遺物のうちでも製塩土器が主体を占め、須恵器や土師器は少量出土しているのみであり、墨書土器や硯など文字関係の資料や緑釉・灰釉などの陶器類は出土していない。以上のことから、官衙などの特別な施設ではなく一般的な集落とする前回調査の評価には変わりはない。



第27図 古代の遺構配置

### 3. 製塩土器について(第28～30図)

今回の調査では、SK87、SK90、ピット群1から製塩土器が出土した。これらの製塩土器は、塩を作る段階でにがりや不純物を除去するための焼塩を行われた際に使用された土器で、いずれも小片である。この焼塩土器に混じって、須恵器の蓋や坏、土師器の甕なども出土した。

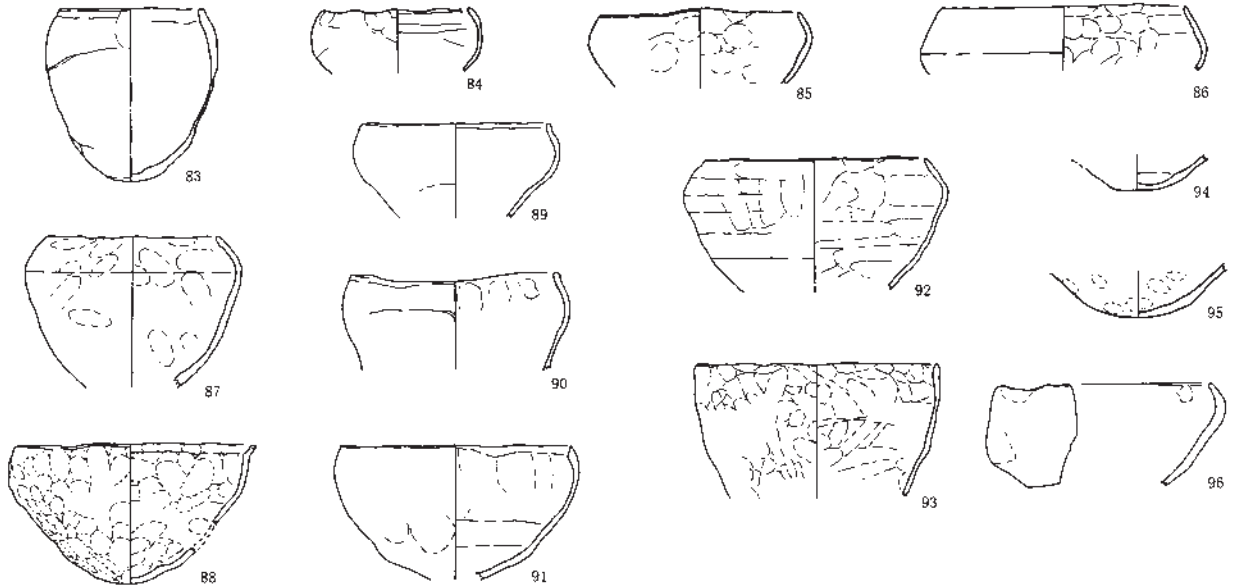
前回(平成21年度)の調査では、製塩土器の廃棄土坑であるSK75を調査し、14個体以上の土器が出土した。そこで今回調査を終えるにあたり、倉谷西中田遺跡から出土した製塩土器について、伯耆国内でのまとまった出土例と比較し、本遺跡の総括とする。

#### (1) 製塩土器がまとまって出土した遺跡と遺構

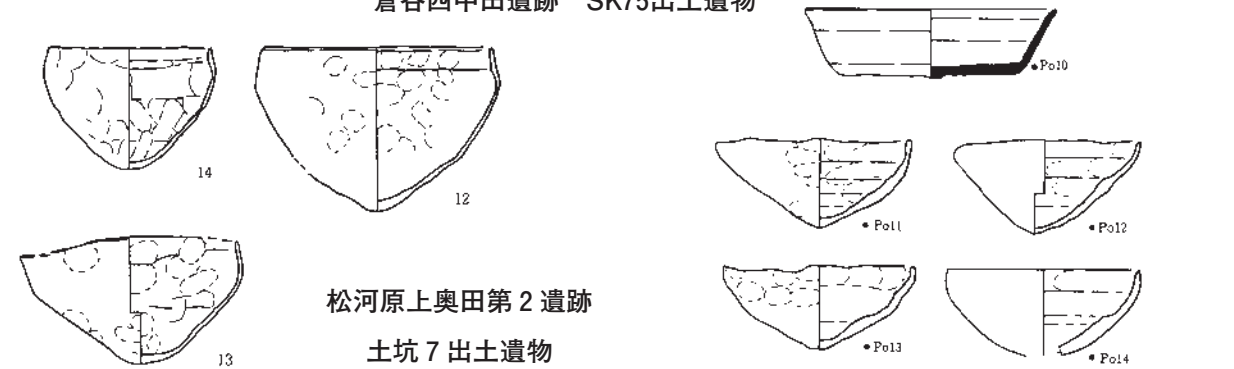
##### 【倉谷西中田遺跡】

遺跡の立地は南西に向かう斜面の頂部からやや下る際に位置する。推定古代山陰道から約0.5km南に位置する。古代の遺構として掘立柱建物跡が8棟、段状遺構3基、土坑墓1基、廃棄土坑1基、ピット群2箇所などがある。ここからは墨書土器などの文字関係資料、搬入品である陶器・磁器類が出土していないことから一般的な集落であるとの評価がなされている[牧本2011]。

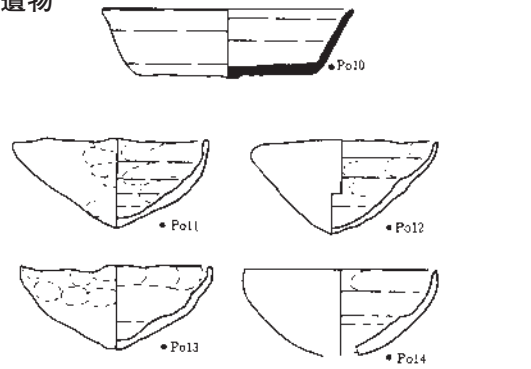




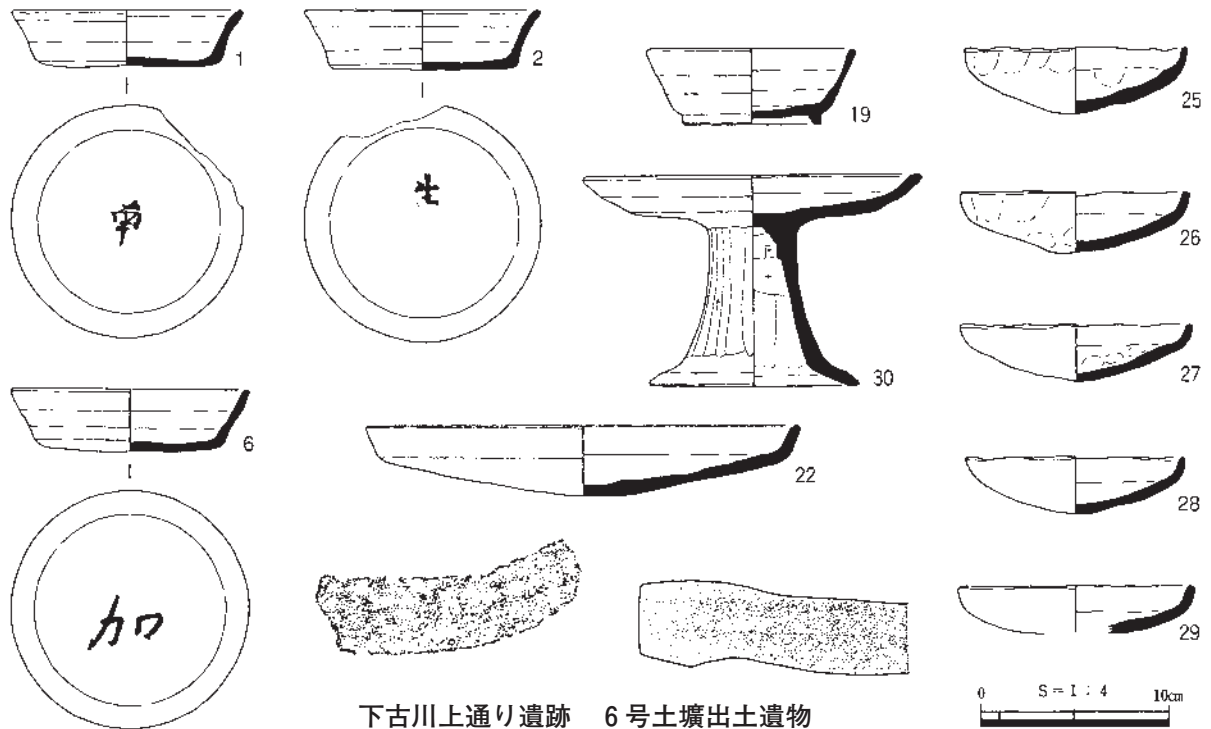
倉谷西中田遺跡 SK75出土遺物



松河原上奥田第2遺跡  
土坑7出土遺物



寺戸第1遺跡 SS01 P1出土遺物



下古川上通り遺跡 6号土壇出土遺物

第29図 伯耆国内の遺構内出土製塩土器ほか出土遺物

### 第3章 倉谷西中田遺跡の調査

土坑から出土した炭化物の年代測定では7世紀中葉から8世紀代で、周辺の遺構から出土した土器との関係では7世紀末から8世紀前半頃の土器が共伴している。

今回の調査においても図化し得た土器の多くは製塩土器であり、須恵器や土師器の坏、甕などは僅かにすぎない。前回の調査結果を裏付ける結果である。なお、共伴する甕片には二次焼成の顕著な痕跡が認められる。

#### 【松河原上奥田第2遺跡】

大山町松河原に所在する。日本海に向かう舌状の丘陵ほぼ頂部に位置する。推定古代山陰道の南約0.5kmに位置する。土坑7は製塩土器の廃棄土坑で、北側はすでに掘削されていたが、ほぼ完形に復元できる製塩土器3個体が出土した。

土坑からは土器とともに炭化物が出土し、3箇所年代測定を行っている。この結果を受けての報告では8世紀後半の資料としている。古代山陰道からは位置的にやや離れており、周辺に古代の遺跡も確認できていない。

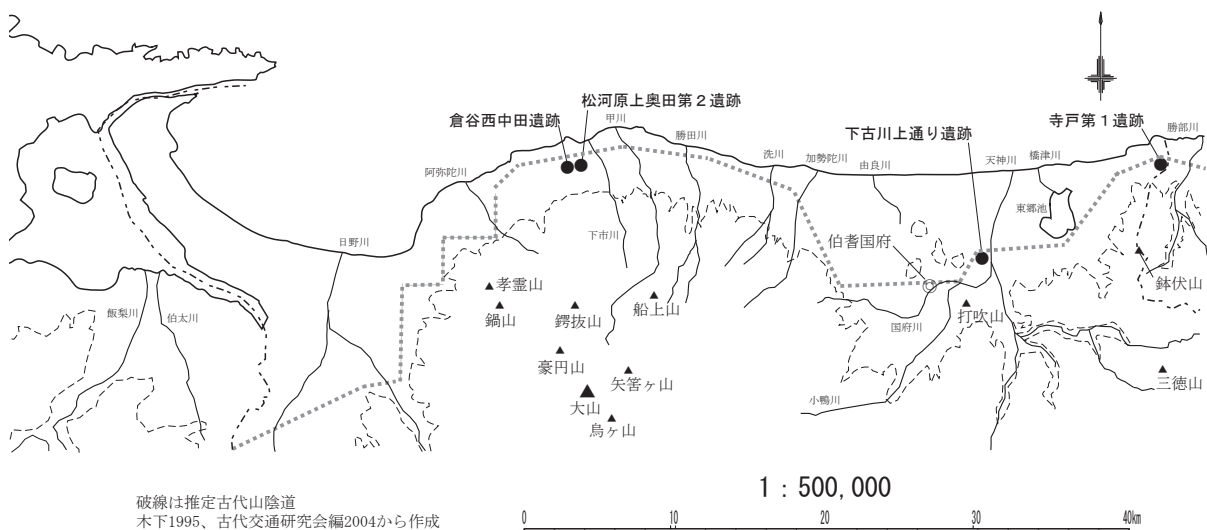
#### 【寺戸第1遺跡】

湯梨浜町寺戸に所在する。東に向かう谷の中腹にあり、眼前には東西に延びる古代山陰道が推定されている。東側には笏賀駅の推定地である石脇第3遺跡森末地区があり、同じ丘陵西側の先端部付近には久津賀という字も残されている。

製塩土器はテラス状遺構の一つであるSS01の範囲内にあるP1から出土した。テラス状遺構は北西方向に延びる平坦面の南東端付近に位置する。須恵器の坏が正位置に置かれ、その下の掘り込みからほぼ完形に復元できる製塩土器が4個体出土した。須恵器は8世紀中葉の所産である。出土状況からみても焼塩の行為に伴う意図的な状況が指摘できる。調査地内からはほかにも掘立柱建物跡や、土坑、土器溜まりなどが出土しており、東隣の石脇第3遺跡と合わせて古代の遺跡が集中する地区で、テラス状遺構や掘立柱建物の規模などからも、一般的な集落とは考えにくい様相を示している。

#### 【下古川上通り遺跡】

倉吉市下古川に所在する。周辺は、西に位置する伯耆国庁から不入岡を経て、松崎に向かう古代山陰道が推定されており、国府・小鴨・天神の三河川が合流した後の天神川を調査地周辺で渡ることが推定されている[木下1995]。



破線は推定古代山陰道  
木下1995、古代交通研究会編2004から作成

第30図 伯耆国内の製塩土器出土遺跡位置図

調査では、掘立柱建物跡、土坑、溝を検出した。遺物は古墳、奈良・平安、鎌倉にかけての土器や陶磁器が出土しているが、主体をなすのは奈良末から平安時代初頭にかけての赤彩された土師器である。このうち、一括廃棄土坑(6号土坑)で、赤彩された土師器の無高台坏18点、高台付坏1点、無高台皿1点、高台付皿2点、製塩土器6点、土師器高坏3点、甕1点、竈1点、平瓦1点が出土した。墨書はいずれも無高台坏の外底面に記され、「南」1点、「生」4点、「加」1点、不明1点である。瓦が出土することなどからみても通常の集落から出土する遺物とは異なる。遺物の時期は、伯耆国庁第1段階[巽1979]、8世紀末から9世紀初頭である。また瓦は伯耆国分寺式651と報告されている。

出土状況は寺戸第1遺跡のような意図的な廃棄状況ではなく、一括で廃棄された状況ではあるが、墨書土器や瓦、赤彩された高坏や皿が共伴していることから、一般的な集落とは異なる土器様相を示している。

## (2) 製塩土器の形状

いずれも逆円錐形を呈する焼塩土器[八峠2000]である。器壁の厚さと形状などにより、二つに細分できる。器壁が薄く、深い形状を逆円錐形焼塩土器A類(以下、A類)、器壁が厚く、浅い形状を逆円錐形焼塩土器B類(以下、B類)とする。

### 【A類】

本遺跡と松河原上奥田第2遺跡の資料が該当する。当該地は推定古代山陰道から0.5km程度内陸に位置している。周辺は大山の丘陵が放射状に海岸付近までせり出しており、結果として丘陵を横断することは難しいため、道も集落も海沿いに立地せざるをえない状況にある。

A類はいずれも器壁が薄く、比較的深い形状である。口縁部は内傾するものと僅かながら外反するものがある。法量的には大・中・小とばらつきが大きい。本遺跡のものを8世紀前半、松河原上奥田第2遺跡のものは8世紀後半と時期は異なるが、器形についての変遷は捉えにくい。あえて本遺跡から松河原への時期的な変遷を想定すると、①形状が不安定なものが定形化し、②法量が不定なものが概ね大・中・小の三法量に規格化されていく、という二つの傾向を見いだすことができる。

### 【B類】

寺戸第1遺跡と下古川上通り遺跡の資料が該当する。B類はA類に比べ器壁は厚く、概して浅い。口縁端部は僅かに内湾する。形状の規格性が高く、法量もほぼ安定している。時期的な変遷は、寺戸第1遺跡と下古川上通り遺跡をみる限り、8世紀中葉から末、9世紀初頭にかけて、口径が大きく浅く皿状の形態へと変遷すると考える。

これらの焼塩土器を検討すると、基本的にA類の形状は熱効率を考慮して薄く作られ、当初は形状や法量に関する意識が高くはない。一方、B類は複数個体の形状や法量が一定し、A類と比べ小型であるにも関わらず器壁は厚い。これが、山中章が指摘[山中1997]するように製塩土器が移動にも使用されたものと解釈すれば、A類は生産用、B類は移動などを兼ねたほかの用途を視野に入れた作りといえる。例えば瀬戸内の状況と比較[近藤編1994]しても、海岸付近の塩の生産地で出土する器壁の薄いものと、海のない地域で使用された器壁の厚い焼塩土器とは形状・機能においても区別できる。

## (3) 出土状況と遺跡の性格

これらの遺跡の性格について、一般的な集落とみられる「A類出土の遺跡」と、公的な関係地とみられる「B類出土の遺跡」とに2大別して検討する。

#### 【A類出土の遺跡】

倉谷西中田遺跡と松河原上奥田第2遺跡が該当する。ここでは遺構内の出土遺物がほぼ製塩土器で占めており、相伴している土器にも特別なものは見あたらない。出土した状況は、いずれも製塩土器を使用後に廃棄しており、いわば塩の最終生成時の状況を示したもので、周辺で塩を取りだしたと考える。なお倉谷西中田遺跡では、製塩土器と共に二次焼成を顕著に受けた土師器甕片が出土しており、煎熬段階で使用された可能性が考えられる。

いずれも古代山陰道よりもやや内陸に位置しており、直接的な関係は認め難い。これまでに周辺の海岸沿いでは、古代の土器製塩遺跡は確認されていない。瀬戸内や北部九州では、塩を生産するための煎熬イコール焼塩がセットとなる遺跡が多数存在するが、当該地では、煎熬の行われた場所と焼塩の行われた場所が異なること、具体的には海岸沿いで煎熬、やや内陸の当遺跡などで焼塩が行われたと想定する必要があるだろう。

#### 【B類出土の遺跡】

寺戸第1遺跡と下古川上通り遺跡が該当する。寺戸第1遺跡の例は製塩土器が完形に復元できることや、須恵器が正位置に置かれていたこと、下古川上通り遺跡例は廃棄土坑であるが、赤彩された土器や高坏などと相伴しており、墨書土器をみても一般的な集落ではなく、特別な状況で利用されたものが廃棄されたものとする。また瓦が出土していることから、周囲に瓦葺きの施設の存在が指摘できる。ともに推定古代山陰道に面しており、寺戸第1遺跡は駅舎隣接地、下古川上通り遺跡は天神川の「渡し」周辺とみられており、いずれも交通の要衝に位置している。

西日本での古代の製塩については、北部九州や瀬戸内など、海沿いで土器製塩が盛んな地域では資料も豊富であり、研究が進展しているが、鳥取県についてはようやく資料が増加しつつある程度で、製塩遺跡は確認されていない。北部九州や山陰西部では玄界灘式煎熬土器がの出土があるものの、伯耆国内の様相、煎熬段階で使用された土器については未解明のままである。

今回の調査では、当該地域の焼塩土器について、器種に応じた生産用と儀式・祭祀用の使い分け、煎熬と焼塩の行われた立地の違い、器種の変遷と法量についてなど、いくつかの特徴を指摘することができた。このことは周辺の山陰海岸沿いでの土器製塩の実態を解明するための一つの問題提起になり得よう。

#### 引用・参考文献

- 巽淳一郎 1979「土器類」『伯耆国跡発掘調査概報(第5・6次)』倉吉市教育委員会
- 近藤義郎編 1994「日本土器製塩研究」青木書店
- 木下良 1995「国府と交通路」『シンポジウムよみがえる古代の伯耆 資料』倉吉市教育委員会
- 山中章 1997「日本古代都城の研究」1997
- 財団法人鳥取県教育文化財団 1998「石脇第3遺跡-森末地区・操り地区- 石脇8・9号墳 寺戸第1遺跡 寺戸第2遺跡 石脇第1遺跡」鳥取県教育文化財団調査報告書54
- 八峠興 2000「因幡・伯耆の製塩土器に関する一予察」『古文化談叢』第44集 九州古文化研究会
- 古代交通研究会編 2004「日本古代の道路事典」八木書店
- 倉吉市教育委員会 2008「下古川上通り遺跡第2字発掘調査報告書」倉吉市文化財調査報告書 第132集
- 鳥取県埋蔵文化財センター 2011『倉谷西中田遺跡』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書36
- 牧本哲雄 2011「第5章 総括 第3節 古代の倉谷西中田遺跡」『倉谷西中田遺跡』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書36
- 鳥取県埋蔵文化財センター 2011「古代の須恵器」『平成22年度 埋蔵文化財専門職員研修「遺物調査検討課程」』
- 鳥取県埋蔵文化財センター 2012『松河原上奥田第2遺跡 下市前築地遺跡』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書44